変貌するブラジル社会の断章

進藤　賢一

はじめに

ブラジル在住の三森正氏がサンパウロから電話をくれた。「これから日本に行くので是非、札幌でお会いしたい。コチア産業組合（以下、産組）が危険な状態です。ご意見をお聞かせください」といったのは、もう12年も前の1992年春ではなかったかと思う。翌年コチア産組は倒産した。三森氏はコチア産組に関係していた方で、91年３月に書いた前林氏と私の共著「業務報告にみるコチア産組の経営実態」や同月発行の拙著「コチア産業組合の仕組とブラジル農業の現段階」などを読んでいて、危機回避に向け何か知恵がないものかと煩悶苦悩していたときだった。

真駒内の親戚筋に投宿していた三森氏と芸術の森に近い和食レストランで話を伺いながら、ブラジル最大級の産業組合が経営危機に陥っている背景が少しずつ理解できた。

危機の原因は、外的要因として軍事政権による政変で国の農業政策や協同組合政策が急速に変化したこと、その状況に産組指導部が適切に対応していなかった。内的要因としては産業組合設立時の日系一世々代がこの世を去り、二世・三世のリーダーがバトンを引き継いで、組合運営方針や理念に変化が出てきたことだった。

病根はかなり深いと思った。三世々代になると日系などの言葉が通用しないほど日本人・日系人のブラジル化が進んでいる。日系人の枠組みでひとをくくれるような状況はとうに消えていたのである。

私達は研究者であるからさまざまなデータ分析や調査報告はするが、経営コンサルタントではないから組合建て直しについてコメントできないし、再建方法の提示など難しいという以外なかった。また、責任ある回答をする立場にもなかった。

私は、近いうちにブラジルを訪れ、コチア産業組合がどんな展開をして終焉に向かったのか調べる必要性を強く感じたが、その機会にはなかなか恵まれなかった。

2004年８月、17年ぶりにブラジルの土を踏んだ。以前にお会いした人々のなかには既に亡くなっていた方々も少なくなかった。

コチア産業組合関係者との面談についてはサンパウロの飼料会社経営の大橋勘吾氏（北海道ブラジル協会副会長）が、私のブラジル行きを知って頻繁に電話連絡をくれ、日程調整に熱く対応してくれた。北海道ブラジル協会、日伯協会北海道支部の方々と連絡を取り、場所や時間をセットしてくれたし、サンパウロでは毎回同行して案内もしてくれた。

パラナ州ロンドリナ市にはコチア産組支部、倉庫があり、産組経営の製綿工場やコーヒー磨煎工場があった。パラナ州はサンパウロ州に次ぐ多くの日系人の生活する舞台なのである。

パラナ州はロンドリナ大学の中川原淑也教授（地理学）や同八巻鉄也教授（建築学）を中心に多くの日系人が農場や組合の案内役を買って出てくれた。前回、前々回もそうであったが、研究者の案内ネットワークが出来ているのと、次元の異なる重厚な親切さ、こころのこもった待遇には、いつものことながら日本での調査地やフィールド先とは違うほのぼのとした暖かさを感じる。

ロンドリナ市ではコチア産組倒産２年後の1995年、日系二世の村手カルロス理事長率いる「インテグラーダ産業組合」が旗揚げし、確実に経営を拡大し、10年後の04年には９億レアルの売り上げ、約１億レアル（１USドルは３レアル）の黒字を記録した。組合員は1200、支部は32と安定的拡大基調にある。

倒産したコチア産組の資産等、銀行管理のものを少しずつ買収しながら経営を固めつつあるのだ。倒れるものあれば、生まれるものもある。宿命ではなく、そこに歴史的必然が横たわっている思いがした。

こうしたコチア産組をめぐる状況変化だけでなくパラナ州やその近隣州での農業構造や土地利用（作目）変化も著しい。

かつてコーヒー畑一色だったパラナの波状台地は、いまやコーヒー樹

など見る影も無い。

小麦、大豆、トウモロコシなど穀物類の土地利用に変わった。

農業労働者（特にコロノなど）の労働条件が法的に改善していく過程と農村機械化、近代化の波が重なって土地利用にも、農業経営構造にも変化が生じているのである。

都市についてもサンパウロ市やロンドリナ市を案内されただけであるが、17年間の変貌は目を見張るものがある。

ヨーロッパの中世城郭都市ノルトリンゲンやロッテンバークほどでないにしても、都市生活者の階層格差が拡大し、高所得者は高い塀で囲まれ、厳重に警備された居住地に住み、他方、低所得者は不良住宅地区スラム（ブラジルではファベーラという）を形成、中所得者は街中に住む、いわゆる棲み分けが一層進んだ。アメリカ合衆国にも同じような棲み分けが見られるが度合いというか、較差の違いはブラジルが一段と激しい。

そんな都市機能の一旦、農村地帯の変貌なども紹介しよう。

コチア産業組合関連の分析は『経済と経営』の最新号に「コチア産業組合の展開と終焉」で掲載済みであるから、本稿ではさまざまなひとびとに聞き取り調査し、あるいはこぼれ話程度に話された事柄のなかに重要だと思われることも数多くあるので、それらを拾い上げて記述しておきたいと思う。日本からブラジルに移住した人々が経験した、嵐と平穏、環境変化の厳しい社会生活の一端を垣間見ることができれば満足である。

（なお、ここでは日本人移住者のうちブラジル国籍を取得したものは日系人、日本人国籍のものは日本人と表示する。初期移民は、ブラジル国籍を取得しない「悲願錦衣帰国型」であったが、第二次大戦後、多くの移住民はブラジル国籍を取得し、定住している）

1．コチア産業組合の顛末

コチア産業組合は1927年（昭和２）発足して93年閉鎖するまで66年間

続いた日系人組合で、ブラジルだけでなく世界でも最大規模を誇っていた。それが破産に追い込まれたのである。背景についてコチア青年連絡協議会顧問でコチア旧友会々長の志村敬夫さん（89歳）に話を伺った。志村さんは、コチア在職時代50年間の日記を読んで来られ、組合の歴史や問題点を話された。（８月16日、サンパウロのコチア産組跡の事務所にて）

１）コチア産業組合発足前夜

コチア産業組合は創立まで準備期間が５年ほどかかっている。

日本からのブラジル移民は1908年（M41）笠戸丸791人が始めてであったが、移民の主力は大正末期に集中した。ブラジルに既に在住している人々が日本人を呼び寄せる、いわゆる「呼び寄せ移民」、自ら獲得した情報と意思に基づく「自由移民」、そして海外興業会社やブラ拓（ブラジル拓殖）会社による「会社経由移民」などが主力を占めた。

大正末期から昭和初期にかけては日本経済が不況に見舞われており、就業の機会に恵まれない人々は“働けばお金をもって故郷に錦を飾れる”宣伝に乗って渡伯した。

ブラジル政府と日本政府の約束では農業移民を入植させることが目的だったが、当初移民の95％は百姓出身ではなかった。

農業経験のない移民達は、百姓になるまで３年、あるいはそれ以上かかった。

ブラジルの奴隷解放が1888（明治21）年、これが、外国移民導入の動機になったのである。

解放された奴隷の代わりに日本から農業移民が渡伯するはずだったが必ずしもそうならなかった。

ファゼンダ農場（エンコミエンダ制による大農場）の草取りや収穫作業にコロノ（小作人）として入植した日本人はファゼンデイロに雇われた別の管理者に見張られての農場労働を強いられたのだった。５％の農業経験者は仕事をうまくこなしたが、農業未経験者にとってコーヒー栽培、収穫、草取りの肉体労働は必ずしもうまくいかず、負債を抱えた人々

も多い。借金を踏み倒し、夜逃げが始まった。笠戸丸移民750人のうち、80％程度は夜逃げの経験をもつ。この第一回移民は大失敗だった、と移民会社の関係者は総括した。

ファゼンデイロ（地主）は怒った。日本移民を使うことはできない。

日本からの移民は出身地で固まる傾向があり、例えば高知県人は高知村を作って栽培作目の研究をはじめる。持参した僅かなお金や、働いた労賃を貯めて狭い土地を買い自作農になるものが増えた。

シチアンテ（自作農）はコロノと違って自らが作物を作り、販売するからその過程で仲介商人が不当に儲けていることがわかるようになる。

農産物取引はいつも買い手市場で農民には不利だった。

商系・商人と闘う必要性が出てくる。

日本でも加工資本や商業資本の収奪を許さないとして、産業組合運動が燎原の火の如く起こっていた大正末期から昭和初期と機を一にしていた。

後にコチア産業組合設立の立役者になる下元健吉は、日本に帰省し日本の産業組合方式そっくりの「産業組合法」を作成し、ブラジル国会で承認するよう動いた。

日本のモデルはロシア産業組合を下敷きにしたものといわれる。

これまでブラジルの法律は、郡単位の組合は認められるが、全国的な組織は組合法上不認可になっていた。

下元健吉は、当時のゼツロバルデス大統領と交渉して郡を越えて広域の産業組合を作ってもいいとお墨付きを得ることに成功する。

日本の産業組合法、これは総合農協の発想と農産物加工分野への進出を認めていたからブラジルで大きな教訓になった。

バストス移住地を中心に４つの南伯（南ブラジル）産業組合が設立され、組合は組合員農家に農産物の集・出荷と作目選択指導をおこなった。

当初、組合員はサンパウロ州とリオデジャネイロ州だけだったが、次第に周辺州にも参加者が増えはじめた。組合は、奥地は冬作に綿花やコーヒー樹を取り入れ、海岸のレジストロ方面はバナナを、それぞれ経営安定作物として導入するように指導する。

都市近郊の蔬菜組合には霜害防止策を伝達した。コチア組合発足前は有志によってこうした活動が続いていた。

コチア産業組合設立は1927年11月、組合員83名で「有限責任コチア・バタータ生産者組合」として発足した。バタータはジャガイモであるから当初は馬鈴薯の集荷、加工、販売が主なものだった。

翌年にはイグアッペ郡の桂植民地に20人の組合員による産業組合が設立され、レジストロにも220名を組織した産業組合が創立する。

1930年からは北パラナ、ロンドリナに開植がはじまり日本人移民の多いトレスバラス移住地が出来たころ、サンパウロ近郊のモジ・ダス・クルーゼスにも産業組合ができた。

1929年は世界恐慌の影響で、コーヒー豆価格が大暴落する。コーヒー樹の生産調整が始まり農産物価格の変動が著しい時期であった。

コーヒー豆が暴落すれば綿花や落花生価格は高騰した。日系人の移住地もサンパウロ州奥地から北パラナに日系二世などが移動する。

北パラナはロンドリナ市のほかアサイ市（当時は朝日）やウライ市の日本人達はコーヒー豆や、綿花、苧麻（ラミー）栽培と生産に勢を出した。

こうしたなかで1941年、コチア産業組合の中核として動く全ブラジルの日本人青年会を網羅した「全伯産業組合青年連盟」（以下、産青連）が結成されたのである。

第二次世界大戦勃発前夜といっていい。

産青連は「ブラジルの土を愛する」「日本人に合った形でのブラジル永住」など掲げて発足当時から500人程度のメンバーがいた。志村啓夫はマリリア地区支部長だった。

下元健吉は「ブラジルで半年農産物を栽培し、あと半年遊んで暮らすのは農家経営の安定に災いをもたらす」といい、通年農畜産生産サイクルを作るには養鶏など畜産を取り入れる、そして土壌を肥やす、奥地開拓を視野にいれる、など提案していたのだ。

2）第二次世界大戦と日系人のおかれた立場

戦争前夜は国家統制が厳しくなりサンパウロ新聞など、日本字新聞が次々廃刊にさせられ、また当局から廃刊を命じられた。

太平洋戦争がはじまりブラジルは日本との国交断絶、大統領令として在伯日本人の資産凍結令が出される。

ブラジル在住の日本大使、総領事など大使館、領事館関係者は急いでブラジルを出国、北米からの退避政府関係者など合わせて1600人が日本に帰国し、ブラジルに移住した日系移民は日本との連絡を絶たれ棄民状態になった。

戦争中、日系移民は敵国人ということで様々な弾圧を受ける。

1942年にはサンパウロ日本人街コンデからの立ち退き命令が発動され、留置場に拘禁される日本人が増加する。

日本人弾圧にはアメリカの圧力があったのではないか。留置場に敵国人を何人投獄したか、日報でアメリカに報告することになっていたからだ。

1943年にはサンパウロ海岸地帯から日独枢軸国民１万家族の立ち退き命令があり、内陸奥地への移転が始まった。

日系資本の工場、商社、農場、銀行などで「清算」の処分にかかるものが続出したと、半田知雄の「移民史年表」には書かれている。

1944年には、青年愛国運動と名乗る団体によって敵性産業と見られた日系人の薄荷工場や養蚕小屋が破壊され、焼き討ちにあった。

戦争気分も下火になった1945年の終戦直前の６月、ブラジルは日本に参戦した。ソ連の参戦時期とほぼ機を一にしている。日本降伏の２ヶ月余前のことである。

日本の敗戦後、ブラジルにはカチ組、マケ組の争いが起こるが加害者は一方的にカチ組、被害者はマケ組の人間だった。多くの日本人がカチ組によって殺されたり傷つけられた。

コチア産業組合の指導者の１人、総領事館にいた青木林三はカチ組の立場をとっていたのでコチアの組合員は動揺した。

日伯通商協定が調印されて、ブラジルに戦後の日本大使館、領事館が開かれるのは1952（昭和27）年である。

第二次大戦中から戦後にかけて棄民状態になった日系ブラジル人と戦後もどってきた日本大使館員、領事館員との軋轢は強く、ブラジル在住の日本人・日系人はブラジル帰化状況、日系人の死亡、出生届けも満足に申告しなかった。

移民たちは戦中、日本に逃亡（移民の認識）した日本の外交官を信用しなかったのである。

領事館員などは移民にとって信用に足りならないと判断され、外交官は頼りにならないと批判的だったのだ。

戦中から戦後にかけてブラジルに帰化した日本人はほとんどいなかった。

３）戦後のコチア産業組合と倒産の舞台裏

コチア産業組合は創立当初75組合を統括していたが、1970年代には125に増えた。

産組の業務は信用、購買、販売、利用に加えて農畜産物加工をも取り込んでいた。戦後、しばらくして銀行取引きが認められるが、ブラジル政府はコチア産業組合に対して、国立ブラジル銀行と州立サンパウロ銀行に限って認めたのである。

法令では農業関係預金の50％は貸し出してもいいとなっていたが当時の状況は、金を借りて欲しいのが銀行の心境だった。

軍事政権が20年も続き、1980年ごろはインフレも最高潮に達していた。

コチア産業組合は上記の銀行から金を借り入れ、主に日系組合員に貸し付けた。金の借主は多額の負債もすぐに返還出来たが経営費が物価以上に上昇するなどで経営を圧迫する人々も出たのである。

政府の決めた短期貸付利子は30％で、３ヶ月を経過すると利子だけで元金に匹敵した。

悪性のインフレで将来予測もできない。コチアの経営陣は手薄だっただけでなくこうした状況見通しできる人材がいなかった。本当は経営のプロを雇っておくべきだったのではないか。

インフレ時代、コチアにとっては帳簿上新しい投資が必要になってい

た。余剰資金をスイス銀行に預けるなどの意見もあったが結局セラード開発に投資、この事業に踏み出すことになった。

1963～67年コチアの専務理事で農家出身の日系２世、安田ファビオが商工大臣に起用されたが軍事独裁政権のもとでは力量が十分発揮できなかった。

サンパウロ大学デルフィン・ネット教授が政府の経済関係を押さえていて安田ファビオは途中大臣の座を追われる。

安田はいった。“潰れかかった市中銀行も、経営者の意欲が伝われば政府は建て直しに努力した。コチアには債権意欲があるものはいなかった”、と。

“コチアが持つ負債の70％は国立ブラジル銀行と州立サンパウロ銀行がもっていた。繰り延べをすれば助かったはず”と安田はいまでもいう。

ファビオ安田が国立ブラジル銀行頭取と直接交渉したとき、“コチアに再建意欲があるのか”、が質された。

コチア産業組合の井上会長は「再建は難しい、そのことは片山理事長に聞いてくれ」といい、理事長は「古い年齢層がやらなければ出来だろう。信用して任せられる人もいない」と諦め気味だった。

日系組合コチアは指導者層が確実に変化し、設立当初の人々は一線を退いていたのである。

乱脈経営ともいわれるが、組合理事の給与は、月給にして理事長が1.5万ドル（165万円）、理事は1.3万ドル（143万円）支払っていたから一流企業の重役並だ。

この額はアメリカの自動車産業の役員給与に当たり、お手盛りだったという人もいたのだ。

産業組合員は１日15時間働いても夜業手当すら出なかったのに本部職員は残業手当をこっそり取っていた。

出勤しない人がタイムレコーダーに捺印し、組合と契約しているにもかかわらず、商人に抜け売りする組合員も現れた。組合との約束を破棄しておきながら組合に逆ねじを食わす人々も出てくる。

ブラガンサパーリッサバタータ組合は、組合員離れが進行し、組合員

の30%が脱退して、日系人以外の経営する組合に移った。

コチア産業組合が破産すれば、組合員の積立金（農畜産物など取り扱いに応じ、出資金として積み立てた）は戻らない。

250万羽の養鶏をやっていた斉藤さんはコチア組合の取扱い手数料が高いとの理由で脱退した。水元さんの380万羽飼育を筆頭に日本人養鶏家で100万羽以上飼育していた農家は10戸以上あったが、斉藤さんの脱退は少なからずこれらの農家に影響を与えた。

サンパウロ市から200km内陸に入ったアリアンサはリトアニア人が入植して養鶏を始めた場所であるが、コチア組合に献身した下元健吉が“奥地開発は養鶏で、また年間労働力配分も畜産でするべき”、との意見を産青連などを受けて、この地方をとうもろこし主産地に仕立て、養鶏飼料としたことが養鶏産地になった背景である。

サンパウロ市に供給される鶏卵の35%を占めた主産地はアリアンサであった。40%を押さえればプライスリーダーの位置を占め市況値段を出せるので、組合はマットグロッソ州に近いサンパウロのバストスからマリリアにかけて150kmを「卵の町」地帯にする努力をした。

コチア産業組合は「卵の産直」など直接消費地に売り出したほか、「黄身」の部分は冷凍にして輸出に回したのである。

コチアは農業試験場を有し、100アルケール（240ha）を試験研究に使っていた。

サンパウロ州立試験場でも３つしか置いてないのに、コチア産業組合は12の試験場を保有し、農畜産物の試験研究を続けていたのである。

試験場は農業技師を雇い、400人の従業員を使っていた。試験研究や農業後継者育成に熱心だった。

コチア産業組合創立の立役者、下元健吉奨学金制度を発足させ、組合員の農科大学生に対する財政的援助を与えたが、組合に関係ない人々にお金が配分され、組合員の師弟に当たらないなど不明朗な点があると、ブラガンサ支部あたりから不満が出たこともあった。組合員の不満続出は組合活動を弱体化する。

ジャカレーのコチア農学校からは毎年葡萄産地山梨に研修生を送っ

た。イタリア葡萄の系譜を引く「ルビー奥山」は山梨県庁に届けられ100%、甲州での発芽に成功したほどである。

コチア産組は、基本的に組合員からの農畜産物買取りを信条としていたがコチアにソッポを向く組合員がサンパウロ市あたりから増え始め、パラナ州ロンドリナ市に飛び火した。

こうしたことでの組合員の反発が、引き金になり組合員離れを上昇させた。組合上層部は意欲を失い再建の道を諦めた。

2．茨の道を経てコチア産組技師に

小笠原義元氏は８月17日、私がサンパウロを出発する日の午前中、ホテル､｢ニッケイパラセ｣のフロントが探し出してくれた。自宅に電話し、奥様に今日中に義元さんにお会いしたいといったが不在だった。しばらくして義元氏本人から電話がきた。ホテル「バロンルー」で正午落ち合うことになった。

小笠原さんとはリベルタージ街のレストランで「ポルキロ」(さまざまなメニューを皿にとり、目方売りをする食堂）をご馳走になりながら、コチア産組や渡伯後の生活などの話を伺った。

小笠原義元さんは、帯広畜産大学酪農科を卒業して1959年ブラジルに渡った。はじめ日系の鐘ヶ江農場（ファゼンダ）で働き、主に米の栽培を手がけた。このファゼンダはサンパウロから170kmはなれたトレメンベにあった。サンパウロ市のコチア産組技師を経て、サンタカタリーナ州の奥地のサジア食品会社（イタリア系同族企業）に働き場所を変え、２年契約で豚やブロイラーの飼育に携わった。家畜・家禽の餌調達の仕事である。

その後、種鶏を扱うグランジャイトウ会社で20年働く。内容はサジア食品会社と同じである。

ブラジルの日系農場「鐘ヶ江ファゼンダ」に入社し、ブラジルで初の

水田農業をおこなった。それまでブラジルには陸稲栽培はあったが水田はあまりなかった。

鐘ヶ江ファゼンダは水田1000アルケール（2400ha）と牧場1700アルケール（4080ha）を所有していた。水の引けるいい土地は水田に、そうでない土地は牧場として牛を放牧していたのである。

コロノ（農業労働者）約2000人を使い、イタリアの田植えみたいな不規則な植え方をしていたものだった。

水田の裏作はコロノが借用し、バタータ（ジャガイモ）やトマテ（トマト）、その他の野菜などを作っていたが、収穫量の半分は地代として鐘ヶ江ファゼンダに納めることを強制されたのだ。

コロノは小作用の住宅が与えられ、そこから農場に通って働いた。ファゼンダ内には教会が２つ、小学校が２つあり、売店などもいくつかあって１つのコミニテイーを形成していた。鐘ヶ江社長はサンパウロ市に住み、息子４人が農場管理人としてコロノに仕事を分担し、統括していた。

福岡県出身の鐘ヶ江社長は天皇陛下のようなもので、サンパウロ市からファゼンダの赴くときは数百人のコロノを道路整備に狩り出し、社長が通る道を美化した。

水田を始めたのはグアタパラ（政府政策の水田事業）を利用したものであったが、植民地として成功したとはいいがたい。

鐘ヶ江ファゼンダは川の対岸に2000アルケール（4800ha）の土地を購入し、水田造成にとりかかったが、コロノ（農業労働者）移動のためバス５台を買い、主にブラジル人コロノを乗せて移動した。コンバインも７－８台あった。また、技術指導などで北大、東京農大など大卒の日本人10人ほどを採用していた。

牧場は木を切り倒しただけのもので、牧草は植えず野草に依拠する粗放的な放牧をしていた。牛は常時2000頭ぐらいは飼育していたが雑種の肉牛が多かった。

農場ではこんなことがあった。

“君は畜産技師として雇用されている。全ての牛の名前を憶えたか。乗馬して投げ縄で牛を捕まえられないような奴に仕事を任せられない”と

いわれ、責任ある仕事につけなかったときもあった。努力して間もなく牛の名前も憶え、乗馬して投げ縄で牛を捕捉することもできるようになった。

農場には２年契約で雇われたが１年２ヶ月で夜逃げをし、サンパウロ市に逃れた。夜逃げは珍しいことではなく、農場の経営が悪化すると最後まで残って仕事を継続したのは血縁者のみだったと聞いている。

経営のまずさから1970年代のなかごろ鐘ヶ江農場は破産になった。

サンパウロ市では日本人街のリベルダージの安宿に泊まり、溜まり場にいって職を探した。帯広畜産大学の卒業証書をブラジルに持参しなかったことで大学卒として認めてもらえず、いい仕事があってもつけなかった。

コチア産業組合農場の雑草取りで食いつないだが３日間くらい飯が食べられないときもあった。

半年間はコチア農業試験場で草取りの仕事をしていた。

この間、コチア組合の発行する『農業と協同』という雑誌に、鐘ヶ江農場で働いたときのことを書いて投稿した。この雑誌は日本語とポルトガル語で書かれたものである。

この記事内容がコチア産業組合の経営陣の眼にとまり、産業組合本部の畜産技師に採用された。

仕事の内容は、産業組合傘下の養鶏農家を回って鶏の飼育技術・方法を指導することだった。技術指導員をしながらポルトガル語、地理、歴史を勉強して高校教員の検定試験にも合格した。親しい友人の刺激があったからでもある。

コチア産業組合はミナスゼラエス州ヴィソーザ農科大学院マスターコースに２年間国内留学を許可した。大学院では家畜の餌の勉強をした。

再びコチア産組に戻り配合飼料工場（12～13工場あった）で飼料づくりの指導をした。

1969年までコチア産業組合にいたが、65年から67年までは産業組合の全盛期であった。その後、協同組合に対する課税制度がかわり、税の徴

収が行なわれることになりコチア産組は人減らし、合理化を従業員に迫った。

組合本部は「自らが職を外に求めよ」と通告してきたのである。

そこでブロイラーや七面鳥の生産、加工、輸出会社である「サジアkk」に２年契約で入社した。この会社は北京に本社があり、焼肉料理から始まった会社である。

サンパウロ市から700kmはなれた場所にあり、この会社では馬、鶏、七面鳥、ウサギの餌作りをした。

1971年には家畜の餌製造企業である「グランジャイトウkk」に移り、1995年まで餌作りの仕事をし役員にもなった。24年間この会社で働き退職した。今は仕事をしていない。

子供は３人いる。

息子１人は日本でいう百円均一の店に勤め、もう１人は企業経営のコンサルタントをしている。

娘は未婚だが30歳になり、サンパウロ市から3000km離れたペルナンブコ州にいる。ブラジル政府の現地企業プロジェクトで恵まれない子供達を教育するコーデネーターだ。

北海道の当麻に住んでいた母は1980年ブラジルに来て住み着いたが１ヵ年で亡くなった。妹達は２人とも札幌に住んでいる。

父親は中島公園の憲兵隊にいたことがあり、73歳のときブラジルに来て亡くなるまでブラジルで暮らした。

３．インテグラーダでコチア産業組合の再生なるか

10年前の1995年、世界的規模に成長したブラジル日系産業組合と日系南伯銀行が経営破綻し倒産した。既に産業組合経営は多角化し、指導、購買、販売、金融、厚生のほかに工場経営やセラード開発などにも手を伸ばしていった時期である。拡大する先々で工業資本（加工資本）や商社との競合や対立がおこった。

農民・生産者側に立つ組合と自らの利益を優先させる商系・商社との対立は日常的なことである。

小麦やとうもろこし、大豆などを保管するサイロ(カントリーエレベーター）は農場が個人経営で構築しても温度管理が難しく発酵して失敗するだけでなく、サイロまでの運搬費も自分持ちである。だが、商社や産業組合保有のサイロはこうした出費とリスクがない。

商社は、高い買い上げ価格で農民の意識を商社に向けるが、高く買い取れば量をごまかし最終的には商社が利益を確保するなど問題が発生することしばしばである。やはり産業組合の創設は重要だとの認識に、農民はたつ。

インテグラーダ産業組合（村手カルロス理事長）は10年前の1995年設立した日系産組でロンドリーナ市に本拠地をもつ。コチア産業組合が破綻して２年目に創立した。

ブラジル発行の「ニッケイ新聞」の04年８月14日号に「総売上げ伸長インテグラータ組合、“農協の信用”を回復」の見出しがついた記事が載った。

03年の総売上げは７億2700万レアル（１USドルは３レアル）で前年比43.9％増、04年の推定は８億9500万レアルでブラジル国内の日系人が役員を努める農協としては最大規模と報じている。

コチア産組、南伯銀行の解散で日系農協の信用は地に堕ちたからインテグラーダ産業組合の創立は当然マイナスイメージからのスタートだった。

日系人の比較的多いアサイ、コルネリオ・プロコピオ、ロンドリナ、マリンガ、ウライなど14市域から28人が出資者となって組合は発足した。役員は自身の不動産を担保に資金を借りた。

それでも初年度決算では9700万レアルの黒字を出したが支部は32、協賛社は721、組合員は1200の実績を残した。

インテグラーダ産業組合が扱っている主な農畜産物は綿花、アヴェイア、コーヒー豆、果物、ミーリョ（トウモロコシ)、大豆、小麦である。

施設ではアサイ製麺工場、アンジラ・ミーリョ加工工場、ロンドリー

ナ飼料工場である。

現在、組合員は4500人余り、うち非日系人は60%、34の行政域にまたがり44の支部がある。協賛社は1446社でパラナ州内の産業組合の代表格である。

設立の思想が「組合員を大切にしよう」で農業技術指導やマーケット情報提供で信頼度を高めている。背景にコチア産組の失敗を教訓にしていることが伺える。

インテグラーダ産業組合は、慈善活動も熱心で「プランテ・ウン・ソリーゾ（笑みを育てよう）」企画で、これまで7万レアル相当の物資を州内の貧困家庭1万世帯の子供達に分け与えた。

1996年からは植林事業も開始している。

問題があるとすれば「穀物サイロ」などを銀行から貸与されていること。これは旧コチア産組の設備である。

銀行がこうした施設を転売するようなことになれば、産業組合経営にも打撃が予想される。

組合員ではないが、組合員になりたくてもなれない人々もいる。例えば小麦を栽培している農家の近くに小麦貯蔵倉庫（サイロ）がない。別の産組に加入するか商社扱いになる。

インテグラーダ産祖が各地区に施設を充実させ、サービス分野を拡大することが組合員のロットを増やすことに繋がる。

日系人経営になるイングラテーラ産業組合が、コチア産組破綻の教訓をどう取り込んで舵を切っていくのか、それにはブラジル経済の先行きに対する読みと組合員奉仕にどこまで徹底できるかが鍵になろう。

4．1つのメデアがブラジル日系社会に与えた衝撃

サンパウロの日本人街リベルダージ通り角に「喜怒哀楽」と名のつく日本食レストランがある。レストランというより居酒屋・一杯飲み屋の雰囲気だ。

文字通り多くの日系移民が初めて移住したブラジルの土地で喜怒哀楽

を感じて生活していたのであろうからこの名前は素直に受け入れられた。

店は２組の若夫婦で切り盛りされているが午後９時過ぎ、おばあちゃんが店の中の一角にテーブルを出して小学校の子供４～５人に勉強を教えはじめている。狭い飲み屋で、子供を店の中に置いて勉強させたり、遊ばせたりしていることに対して、ママが客に「すいませんね」と謝っている。客の大半は日本人・日系人の店だ。

この店はブラジル料理屋やブラジル人が飲む酒ピンガが置かれているが日本料理とお酒も用意している。

清酒はブラジル産の「東麒麟」とアメリカ産の「カリフォルニア」だ。他はブラジル人の好んで飲むカイピリンヤ（これはサトウキビからとれる焼酎ピンガにライムと砂糖を混ぜたカクテル）が飲まれている。

「東麒麟」はサンパウロから西北130kmにある三菱東山農場の一角で醸造されているブラジル唯一の日本酒だ。かつて日系人は陸稲でつくったこの酒を「頭麒麟」＜頭が痛くなる＞といって揶揄していたが最近は水稲でつくり味も日本で醸造されている清酒と変わらない。「カルフォルニア」はもちろんアメリカ産であり輸入物である。価格も比較的高い。

どうやら子供達は婆さんからポルトガル語を習っている。ポルトガル語はブラジル語ともいわれるこの国の公用語である。

10年ほど前から、ブラジルの地で日本のNHK衛星放送が見られるようになり日本の情報が大量に流れるようになった。

同時に、日本のレンタルビデオやCDがが普及してきているため、子供達はこうしたソフトをレンタルや新規購入によって利用するため日本語をポルトガル語に先行させて憶える傾向が強くなった。これまでポルトガル語でなければ何も通じなかった世界に、急に日本語が氾濫する面白い現象が起こっている。

パラナ州の比較的日本人居住者の占める割合の高いウライ市の田村元市長が、隣のアサイ市に比べ、ウライは日本語教室がないし、子供に対する日本語教育が徹底できないから日本に高校生や大学生を留学させようにも留学生試験に合格しない、と嘆いていたことがあった。アサイ市

では日本から講師を招き、子供達に日本語教育をしている。しかし、ウライはそれができないから日本に留学する子供や学生はほとんどいない。

NHK衛星放送の導入と普及はこうした悩みを解消する役割を果たしそうだ。

パラナ州ロンドリナの故沼田貞作家に集合した沼田一族の人達は、口を揃えてNHK衛星放送が日本の情報を正確に伝えてくれること、もうひとつは日本語の会話や発音のすばらしさを教えてくれる、長い間日本を離れて生活している日系ブラジル人の日本語が変形しているのかもしれない、といった話題になった。

しかし、日系ブラジル人と話しているとブラジルには古きよき時代の日本語が残っているではないか。日本ではもう死語になってしまった「帳面」、「写真機」、「活動写真」、「タライ」などの言葉がどんどん飛び出す。また「緑青々してますね」といえば「緑が何故青いですか」と問われる。

ブラジルは日本ではないと感じながらも古き善き時代の日本語が地球の裏側で消え去っていくのは悲しいことと思えてならない。NHK衛星放送の普及はそうした負の側面を持っていることを忘れてはならない。

衛星放送の普及は思わぬところで大衆文化の普及に役立っている。

17年前のサンパウロ市内でも「カラオケ」店はいくつかあった。しかし演歌など歌う人も少なかったし、日本のうたの心を理解しているのだろうか、と思われるほど音痴な歌いっぷりだったことを憶えている。演歌やポップスもブラジル伝統のサンバやボサノバに大きく遅れをとっていた。

しかし、04年８月、サンパウロ市内で行なわれた北海道・ブラジルラーメン会（参加者約500人）は伯・北海道協会の体育館で行なわれ、舞台上では素人カラオケ大会が催され盛んに演歌が唄われたが、この旨さは恐れ入った。

日本の「のど自慢大会」を上回る華やかさと上手さである。

マルシアなどのブラジル人歌手が日本でデビューしていることもあろうが、NHK衛星放送の影響は決して少なくない。旧世代の日系移民に

とって、日本は母国であり、故郷なのだ。そして、二世、三世の日系人も父母や祖父母の故郷日本に熱い何かを求めていることも確かなようだ。なにはともあれ日本の対蹠点に近いブラジルが日本語衛星放送のメデアを通して急速に近くなっていることだけは確かである。

5．高級囲い壁住居群と収入差市民隔離の都市化

ロンドリナ大学の中川原教授（地理学）が人口50万人パラナ州第２の都市、ロンドリナ郊外を案内してくれた。どうしても見せたい場所がある。それは城壁都市のような頑丈な囲い塀と砦入り口の城門を思わせるエントランスだった。ドイツ中世の城郭都市ロッテンバーグやネルトリンゲンを思わせる光景だ。

街の周辺にこうした囲い塀住宅地は何箇所もある。そのうちの１つの内部を見せてもらうことで交渉に時間がかかっている。他人に見せたくない住居環境であることを伺わせる。

城門の守衛に条件を付けられる。車で走るだけ。車を止めないこと、写真を撮らないことだ。

城門の内部に入って車のスピードを超スローで回ってみる。囲い塀のなかには大きな人造池が造成されていてゴルフ場もある。住宅は屋敷が広く、建物も巨大だ。一見してリッチな階層の住宅群であることはすぐわかる。広い住宅地間の道路も滅多に車が通らないから子供達の遊び場だ。

どんな職業の人たちが住んでいるのか、聞いた。中川原教授は実業家、医師、弁護士、裁判官です、と応えた。大学教授などはむろん入っていない。

囲い塀のなかには学校はないから、彼らは特殊なハイソサイアティであっても学校は塀の外に行く。城門の近くに、日本人の高橋健太郎氏が経営する「アメリカンスクール」がある。１ヶ月の月謝が450ドル（５万円）の私立小学校であり、上流階級の児童が集まる。アメリカンスクールというがアメリカ人の経営する学校でも、アメリカ人の子弟が通う学

校でもない。この囲い込み集落に住む父母は上流階級出身者の生徒が集まる小学校を物色し、子供の進路を決める。彼らは中学・高校も私立名門校へ行くことになり庶民との接点は子供のときから途絶える。100台以上の車が入居と学校入学の申し込みに来て車列を作っているのに出会った。

塀で囲い込んだ高級住宅地に隣接してアメリカンスクールが建てられており、子供のころから階層差を意識させることでいびつな人間形成になってしまう危険を中川原氏は憂いていた。

一部造成中の住宅団地近くの広告板には「ロールスロイス」や「ハーレーダビッドソン」が大きく掲げられていた。日本でロールスロイスの看板や新聞広告など見たことがない。

アメリカ合衆国の場合、大学寮は医師の卵、法律家の卵といった将来同業者になる同僚が一緒に生活している場面が珍しくない。大学時代の親交が将来極めて大きな事業上の意味を持っていることはいいうまでもない。そのネットワーク素地は学生時代につくるのである。

学生は、ほぼ成人で意識も大人の世界だ。小中学校生とはまるで違う。ブラジルでは子供のころから階層差別社会を前提として生活し、教育されている。

こうした囲い込み塀分譲地を販売しているのは主にサンパウロの不動産業者だという。

ロンドリナ市内の故沼田貞作氏宅に招待された。貞作氏は北海道・ブラジル協会会長を長く努めたファゼンデイロ（大地主）である。娘の広子さんは弁護士、孫娘も、その夫も弁護士だ。

広子さんに弁護士業の感想を聞くと「今のような経済的には不況で比較的世の中が不安定、荒れているときは揉め事が多く商売になるのです」と応え、ロンドリナから車で東南東に６～７時間走ったところサンタカタリーナ州の海岸に別荘があるので、是非ご案内します。今回日程が取れないならば次回に」という。

故貞作氏の奥さんは「軍政時代はインフレが続き、購入した土地はた

ちまちにして自分のものになったのでねえ、インフレもありがたかったですよ」といった。

軍政時代は１年に1000％を越すインフレだから銀行の借金などまたたくまに返すことができたのだ。富める者に厚く、貧しいものに薄い政策が展開された時代も終わり、平等化が進むなかで、隔離塀集落の出現は新しい差別時代を予測させる。

６．日系ブラジル人の社会浸透と文化的混交、人種的混血化

04年８月14日、南アフリカ共和国総領事とロンドリナ大学スタッフの交流会が市内のホテルであった。参加者は100人程度。

南アフリカ総領事は英語で挨拶した。ブラジルと南アフリカは南半球に所属していて経済交流が活発化してきているが、文化交流も進展させる必要がある。ブラジル産業の将来性は十分あり、南アフリカは大きな期待をしている。政権交代以後のマンデラ思想が建国の中軸にある、などの挨拶がありポルトガル語への通訳も行なわれた。

南アフリカからやって来た歌手による民俗音楽の披露も行なわれなごやかなロンドリナ大学と南アフリカ領事館関係者の交流だった。

ロンドリナ大学はパラナ州の田舎大学であるが、国際化は進んでいる。外国大学との交流はもちろん、領事館のような外交ルート、あるいは文部省のような文化・教育ルートでさまざまな交流が盛んだ。

ポルトガル語はスペイン語やフランス語に近い共有性があり、中南米や南ヨーロッパとは言葉の上での障害が少ないことも背景になっている。

参加者の１人、日系ブラジル人の若いオーバードクターのエドバルド・バルセ医学博士と出会った。どう見ても日本人だが日本語は分からない。日系三世で英語は達者だ。母親の系統は広島県、父親は東京都近郊であると聞いているが日本には行ったことがないので状況はわからない。日本に働きに行った友人が「日本はごみもなく、清潔できれい、建物も汚

れていない」といっていた。

彼がパーテーに連れてきたフィアンセはイタリア人とインデイオと黒人の混血だが、彼はメスチーソといっている。普通、メスチーソといえば、白人とインデイオの混血である。

ブラックの血が混じってもメスチーソというかどうか知らないが、それ以上にもう純粋なメスチーソやサンボ（黒人とインデオの混血）、ムラット（黒人と白人の混血）などが見当たらない時代になってきたことを示している。彼は白人と黒人とインディオの混血をメスチーソといい、特に結婚に対する親の反対もないから結婚するつもり、という。

20年も前の日系一世は日本人同士の結婚が普通、日系二世に対しても親の世代は純血維持、大和血液の分散を恐れていた。だが、若干の混血は認めざるを得ない状況だった。

今回、ロンドリナを訪れ、20年前に日系人の混血を恐れていた日系一世の孫の世代が軒並み混血結婚していることに対して祖父母世代は「ブラジル人（混血）にもいい人がいますよ。日本人より純粋な人もいる」の説明が飛び込んでくる。20年前は、混血拒否組も日系三世の時代には、混血という現実が先行してしまって、それを覆すような論拠が見出せないでいる。

もはや日系人（ジャパニーズ・ブラジリアン）などといわずブラジル人というべき人々だ。

日系人の混血化が進めば、当然日本的慣習やしきたり、考え方も変化する。混住社会ではそれが最も合理的、実質的である。

7．ロンドリナ都市設計を担当する日系人教授

フンベルト・ヤマキ教授の著作「Iconographia Londorinence」（1930～50）が2003年発刊され贈呈を受けた。

著書のなかでロンドリナ70年の都市の拡大過程を克明にトレースし、変貌過程を詳細に図化した。この街はロシア人による格子状都市設計で、標高700mの高台を市街地の中心に描き、中腹に鉄道線路と駅などを配

置した。宅地や街路はスパイラル状になっている。

八巻さんは、マリンガ（ドイツ人が開植した街）が地形に合わせた設計になっているのにイギリス人測量士（パーケット・アーウイン）がこれに対して批判をした。内容は、道路を幅広くとっておきながら宅地と農地、中間の緑地の構成がうまくいっていないということだった。

このことに着目し、彼はロンドリナ都市設計を再検討した。

ロンドリナを1932年の都市デザインのなかで読み取ってみると、前提はブラジルの都市配置がサンパウロ以西に100kmおきに中都市、15kmおきに小都市の国家都市配地原則が働いている、ことが理解できた。

宅地、緑地、農地の関係も合理的に設計されている場合が多い。問題は都市の拡大は外延化を伴いながら、既成の古い部分、中心に近い部分が再開発されるとき、何を保存し、何を整理し、何を新しく構築するかの点に焦点を絞り、ロンドリナ中心部に近代的な公園を配置した中心域再開発デザインをつくった。

古い京都の街に、近代的な京都駅を設計した原広司のような役割も含まれている。

八巻教授はサンパウロ生まれの日系二世であるが大阪大学に７年間留学し、日本の都市デザインにも精通している。

丘の中腹にあるかつてのロンドリナ鉄道駅（今は駅が移動し、鉄道博物館となっている）に八巻氏と中川原氏が案内してくれた。

鉄道駅はロンドリナ大学が管理する博物館で鉄道と開拓前線が西域に向かって進んでいたころの様子を伺うことができる。丁度北アメリカの開拓前線が鉄道によって西進していたころの状況によく似ている。

鉄道は奥地に開拓前線を進める先導役を果たしたが、街が拡大すると駅や線路は街の発展の障害物になり郊外に移される場合が多い。

八巻教授は、街の木を切る、建物を壊す場合、何を壊し何を生かすか、生活と文化を護る角度から22世紀、23世紀に耐えうる都市デザインを工夫し、都市問題の解決に情熱を燃やしていた。

鉄道博物館長でロンドリナ大学教授（白人）は日系人の多いウライ市に10年以上住んだことがある。市長はたいてい日系人だった。田村市長

は医者でもあったり、ラミー（苧麻）のファゼンデイロ（大地主）でもあった。

日系社会の面白いところは運動会にいくと賞品を出すこと、音楽に美空ひばりがよくかかっていたことだ、とブラジル日系社会の裏面を見ていた。

ロンドリナ市の中心部に八巻教授が設計した公園があった。緑のなかにいくつものオブジェを取り入れた斬新なデザインで、多少奇抜かとも思われるが、原広司設計の京都駅に魅せられた私には、新鮮に思えた。

パラナ州にあるロンドリーナはロンドンの人々が、そしてマリンガはドイツ人が開植した街で原野の真っ只中に図面を引き、農場を分譲しその中心に街をつくった。歴史は比較的新しく、斬新な企画による都市設計が目立っている。

8．作家でファゼンデイロの日系移民

沼田信一著、『信ちゃんの昔話シリーズ』全10巻が刊行されている。第一部から第五部は「カフェーと移民」「ピンガ（サトウキビでつくった焼酎）と移民」、「毒蛇と移民」「ムダンサ（引越し）と移民」」、「赤土と移民」そして第六部から十部は「ビッショ（砂ノミ）と移民」、「シェアーダ（霜）と移民」、「戦争と移民」、「風土病と移民」、「ジャングルと移民」である。この10巻は1996年４月から2002年１月にかけて順次刊行された、いわばブラジル日系移民のモノグラフである。

印象強いのは「赤土と移民」のなかでブラジルのパラナ州に広く分布する玄武岩の風化土壌テラローシャの存在が、移民のコーヒー耕作と生活維持の上で極めて重要な役割を果たしたことをあげている。

この土壌は肥沃で30年～40年は無肥料で農産物が収穫できる。肥沃度だけでなく水はけもいいから特にコーヒー樹には最適の土壌だ。

1930年代の入植当時は種蒔き、草取り、脱穀、運搬はすべて手作業時代で生産量も乏しかったが、テラローシャがもつ地力の有利性で土地代を年賦で払い、さらに土地拡張が可能なだけのコーヒー生産力があった。

コーヒーは価格変動が大きな国際商品であるから、高騰が伝えられると、移民達は原生林が切り倒しコーヒー園を造成したから赤いテラローシャがむき出しに出ていた。

ファゼンデイロやシチアンテなど土地所有農家はもちろん、医者、小間物屋、お菓子屋、写真屋、床屋が原生林を買い、契約労働者を入れて開墾させた時代があった。

マリンガ市からパラグアイ国境までの240kmの範囲の原生林が10年程度で切り開かれ、テラローシャの耕地が出現した。テラローシャの恩恵こそが今日の移民に安定的な生活を保障したというのである。

もう１点は、第10巻の31話に出てくるブラジル農業は「バクチ的農業」の性格が強いことである。

1942年はコーヒーが大霜害で壊滅的打撃を受けたかに見えたが、枯れ木になった木の根元の発芽を移植したり、間作に穀物やサトウキビを植えて繋ぐうちに1950年から70年までのコーヒー好景気に支えられ土地持ち移住農民が急増する。これを機にコロノから脱却しシチアンテ（自作農）になった農民も多かった。

コーヒー価格が急落すると綿花や馬鈴薯の作付けに切り替えて勝負をかけるのであるが、当たれば儲かる、はずれると借金地獄が待っているという状況。ブラジル農業はコーヒーや砂糖モノカルチュアから次第に豆類、とうもろこし、フェジョン豆、小麦、綿花など多角的な土地利用に変って景気循環の負の部分を克服する方向に向かっていったのである。

沼田信一氏は87歳、渡伯後10ヶ月はサンパウロ州のセッテバーラスで稲作を行なっていたが、1934年、パラナ州ロンドリナに入植した。ロンドリナではピオネーロ（パイオニア）である。持参金で政府の売り出した耕地を購入し、日本人土地ブローカーからも土地を買い、労働者を使って原生林の開墾とコーヒーの植え付けなどをした。

沼田氏の計算によると、ブラジルにおける日本人、日系人の土地所有面積は日本国土の４分の１にあたる。二毛作可能地はそのうちの半分程度もあるのだ。

この面積は、日本の耕地面積を上回る驚異の土地所有面積だ。日本のサイズやスケールで測りにくい巨大規模であることを物語っている。

裏作による二毛作もブラジル型土地利用の特徴の１つといえる。

小麦の後に大豆、次いでとうもろこしを裏ー表ー裏と作付けするのが一般的である。コーヒー樹の裏作は小麦かサトウキビであるが、サトウキビは一度栽培すると７～８年は更新しない。最近は５～６年で更新するなど土地生産力を高めるために更新期間を短くする例さえ見受けられる。

1975年から法律が変わり、労働者（コロノなど）の使役は、８時間労働が義務付けられ、雨の下の労働も禁止され、トラックでの労働者輸送も不許可になった。バスを10台以上チャーターし、朝夕労働者を輸送していたのでは割に合わない。労働者の最低賃金制も確立して久しいが、これまであまり守られなかった。守らなくてもいい状態だったのだ。

しかし、ファゼンデイロは農業労働者を従来どおり低賃金、重労働で働かせるわけにいかなくなった。労働者は大地主の法律違反はすかざず裁判で攻めるようになった。弁護士の活躍する舞台は広がっている。むしろ弁護士から小作人を唆して訴える場合すらでてきている。

ファゼンデイロは労働者を使う代わりに機械化を進める。土地を小作人に貸付け地代収入で経営するファゼンデイロもでてきた。

小作人でも800アルケール（2000ha）以上を経営し、４人家族でやっているひともいる。小作人であっても保証人さえいれば土地購入代金を貸し付けてくれる。銀行が無担保の小作人に金を貸すことなどこれまでになかったことである。

沼田信一氏のファゼンダに話を戻そう。

以前はコーヒーモノカルチャーだった農場も、2002年には、ほぼ全面サトウキビ栽培に変わった。さらに、2004年は小麦一色になっている。所有地は数千ヘクタールである。農業労働者保護の法律改正で沼田氏も200アルケール（480ha）は元コロノだった農業労働者４人に貸し付けて地代を取る方式に変えた。私が見せていただいた耕地もコーヒーから小麦とサトウキビ畑に変わったところだった。

沼田氏は小作人を大事にし、信用する精神を貫いている。小作人のトラクター購入についても快く保証人になる。小作人との友好関係を保つことが農業の発展、地域の繁栄に必要なことであると考えているのだ。

サトウキビは砂糖生産に回されるよりも自動車燃料のアルコール生産が目標だ。

ここ２年ぐらいの穀物動向は小麦と大豆の価格が高い。サトウキビも砂糖原料、アルコール原料とも高価格で推移している

コーヒー豆は北パラナ州では激減状態だ。かつてのブラジルコーヒー豆生産の主産地サンパウロ州やパラナ州でのコーヒー豆生産が減少しているがブラジル全体での生産量は減っていない。北に隣接するマットグロッソ、ミナスゼライス、ゴヤスの各州が生産を拡大させているからだ。セラード地帯とよばれる熱帯サバナ地方は、霜害が少なくまた平地も多い。パラナのように丘陵地でアップダウンの多い地形では使えないコーヒーの収穫機械が新興産地では利用できる。気候と地形の自然条件が良好な上に、規模拡大は自由にできるし、地価も安い。主産地の変更は理に合っている。

９．都市化の波で土地切り売り、人生は回り舞台

パラナ州ロンドリナ市の高級住宅地、湖のほとりで高層マンションが立ち並び、高層ビルが目下建設中の真っ只中に竹島農園がある。

竹島氏は盆栽をしながら、マンジョウカ、バナナ、パパイヤなどの栽培もしている。１人の若いドイツ人男性が住み込みで働いているが、彼の興味は盆栽で作物栽培農業にはあまり関心がない。

竹島勝氏は２歳（今は90歳）のとき高知県から両親と共にサンパウロ州のリンスカンナイから45km内陸に入ったサンタアメリカ植民地に入植し、原始林伐採による耕地化を手伝った。開墾した土地にはコーヒーを植えた。ファゼンデイロとは四年契約を更新しながら17年働いたが運よく飼育していた子牛の値がよく売れたためロンドリナに３アルケール（７．２ha）の土地を取得できた。単独でロンドリナに移住し果樹園経

営や苗木の栽培をした。

２年後の1943年、家族をサンパウロ州のサンタアメリカのアベニータ・チラデンテスからパラナ州のロンドリナに呼び寄せた。ファゼンダ（大農場）のコロノ（小作人）より、シチアンテ（自作農）の方がましだからだ。家庭内が５夫婦17人家族になったこともあった。

土地が狭かったので苗木生産に徹し、不足した苗木はサンパウロから取り寄せて売った。

生産者兼商人の生活が続いた。

家族の和がうまくいって苗木で利益が上がった。金庫の中の金をわしづかみにして紙袋に入れ、銀行に持参して貯金した。苗木を欲しい客が列をつくっていたこともしばしばあった。

貯まったお金で毎年10～15アルケール（24ha～36ha）の土地を購入した。

土地は買うこともあれば売ることもあった。細切れ買いだから土地は分散所有で効率はよくなかった。最終的には150アルケール（360ha）程度になり、マンゴー、アボカド、柿、マモン、コーヒーなど栽培したがコーヒーばかりの時代もあった。パパイヤやバナナは栽植しなくても土手や空き地に自然に生えてきた。

みかんは苗木作りで毎年３万本から４万本販売した。

40年前、コロノとして奉公していたサンパウロ州のサンタアメリカのファゼンダに招かれてイタリア葡萄の接ぎ木の講師もつとめた。

苗木生産と平行して趣味で盆栽をはじめ、50年になる。盆栽の技術は上達し、たくさん栽培しているが販売はしない。芸術品であり人に贈答したり、自分で楽しんでいる。

「盆栽素人愛好会」を組織し、いま会員数は40人になった。

自分で所有していた広大な土地は都市化の影響で子供や孫達が次々手放した。

32家族を使用してイタリア葡萄栽培をしていた時期もあったが、お金も土地も消えてすっきりした。お金や財産があると眠られない日々が続く。いまは狭い屋敷(2000平方メートル)とコロノ風(カマラーダの家＝

農業労働者）の家のみになった。

自分の土地は兄、姪、甥の名義に変更、やがて日系のY不動産屋の手に落ちた。もう竹島氏の所有地はほとんどない。48歳になる息子は、「ブラジルは政治が腐敗し、治安が悪い」という理由で日本に働きに行き13年になる。娘はブラジリアの連邦政府で貿易関係の仕事をしている。

「自分のこれまでの生き方はすばらしいもだと思っている。人生は回り舞台だよ。土地を失ってもいまの生活になんら不満はない。いい人生だと思っている。」

竹島農園は規模を大きく縮小し、猫の額ほどの赤色土の土地と小さな家で僅かに残された人生を静かに振り返って発した言葉である。

10. ロンドリナ市の中心部でレストランを経営

ロンドリナ市中心部に中華料理と日本食の「ミナトレストラン」がある。客席は100を超え、日中から混雑し、待ち人が列をなしている。

以前は「松尾食堂」といっていたように松尾進蔵氏の経営である。

松尾さんは佐賀県出身、奥さんは八丈島の出身で既に死亡している。

松尾さんは日本から移住した最初のころはサンパウロ州の鉄道モジアナ線のリベロ・プレットの街にはいり、1920年サンパウロ州のサンシモン駅に近いジャタイコーチのファゼンダでコロノとして１年半働いた。

コーヒー園で１年半は当初の契約期間だった。農業経験のない松尾さん一家にとってつらい毎日だった。夜逃げをするコロノも多かった。

その後、1933年までアラサーッバ駅に近いアグアリンパ植民地に５アルケール（12ha）を購入し開墾した。石ころばかりの土地で条件はよくなかったがコーヒーを植えた。

コーヒーは霜害で全滅し、風土病には２回も冒された。黄熱病が蔓延したためパールパライーゾに移動し、1936年まで働き、翌37年ロンドリナに移った。死は免れたが風土病に利く飲み薬のキニーネや注射液のパルダンが不足していたことで苦しんだ。

ロンドリナ移住後は大工の中川原氏（娘はロンドリナ大学教授）と一

緒に住んでいた。地区はアラサーッバである。

農業から足を荒い、1937年から父親は写真業を始め20年続けた。写真屋は大盛況で利益があった。

第２次大戦後、カチ組、マケ組の争いがあり、カチ組（神道連盟）は20人程度のマケ組日本人を殺した。カチ組には殺された人はいない。

カチ組のなかにはブラジルの土地を処分し、荷物をまとめてサントス港で日本行きの船を待つ人もいた。アプカラーナの親戚はわざわざ日本に敗戦の確認にいった。

妻は1954年うどん屋を始めた。息子４人がうどん屋を手伝うようになってレストランに改装した。松尾さんは日本に出向き、沼津や宇奈月温泉で食堂や中居の訓練をした。長女はニューヨークで美容師をやっている。次女はウノパール大学生だ。

日本ではレストランや温泉宿で客に対するキメ細かなサービスや食事の出し方を学んだ。

ブラジルでそれを生かしている。

11. アウトオブバウンドのないゴルフ場を経営するファゼンデイロ

沼田正治さんは、小麦150アルケール（360ha）、サトウキビ104アルケール（150ha）、大豆21アルケール（50ha）を栽培するロンドリナ市に住むファゼンデイロ（大地主）である。

もとはコーヒーモノカルチャーだったが、今日では上記の穀菽農業に、残り42アルケール（100ha）は牧場として肉牛（ネローレ種＝セブ種）と乳牛（ホルスタイン種）を飼育している。牧草地は更新などしない野草地だ。アルファルファ草を植え、刈り取った後はバンカーサイロで発酵させることもある。燕麦を栽培し肥料にもしている。肥沃な土壌テラローシャも長年の略奪農法で痩せ地化したため緑肥有機肥料が必要になってきている。

150人程度のコロノを使ってモラロジーア、シンココンジュントなど５箇所でファゼンダ経営をしている。

沼田さんは北海道出身、渡伯前にブラジルの土地会社「ブラ拓」と土地売買契約を済ませていたので、いわばコロノ（小作人）として移住したわけではなかった。

渡伯前北海道では菓子屋を営業しており、母親が渡伯時にせんべい焼き鉄板１枚を持参した。

ブラジルでせんべいを焼いて販売したところ大変な人気でよく売れた。次いでお祝い用のラクアンやオコシをつくった。これもヒットして土地購入・拡大の基礎資金になった。

たった１枚のせんべい焼き鉄板が子供達４人をファゼンデイロ（大地主）にする基礎になったと、今は家宝の鉄板を見せてくれた。

1970年はコーヒーの価格が高騰し、２倍になった。大豆も高騰した。

多くのファゼンデイロはこのとき儲けたあぶく銭をパラグアイ（イグアスなど）のカジノで博打につぎ込み、失った。

沼田正治さんは、コーヒーの利益と農場の一部切り売り（約１億円）でこれまでゴルフ場のなかったロンドリナにOBなしの18ホールのカントリークラブをつくり、また１万ドルを寄付して日系社会のアリアンセ（集会所）をつくった。コンピューターは出始めの頃、大型コンピュータ３機をロンドリナ大学に寄贈した。

ゴルフ場はロンドリナ近郊カンベの35アルケール（84ha）の大豆畑と牧場跡に造った。広さでは36ホールできる面積があるが、このなかにゆったりした18ホールを造成、OBなしの自称世界一の広さのコースをつくった。

カジノで得た利益は所詮あぶく銭、良銭とはいえない。ゴルフ場だとみんなで集まり楽しめる、これが沼田氏の考え方だ。

サンパウロの東洋紡の日系人H氏が、毎週ロンドリナに来てゴルフ場設計を無料でしてくれた。設計のプロに依頼すれば１万ドルの設計料は支払わなければならない。

H氏は、紡績会社にいたが仕事に就く前に土地柄を知る必要があるとして、ファゼンダに１か月以上泊り込んで外国人（おかしな話であるが

日系人や日本人はブラジル人のことを外人ないし外国人と呼ぶのが通例になっている）の中で暮らしたりした。ゴルフ場は沖縄桜やヒマラヤ桜を植え、楽しみながら造成していくことを提案してくれた。

東洋紡はブラジルの綿やラミーの買い付けが主な仕事だった。ブラジルの綿は良質だが絹糸とラミーは中国製に負けているなど、世界の農産物市場の情報を入れてくれた。

丸紅も集荷に入ってきており、プロコピオ・コルネリオには加工場があった。

農場の一部は切り売りした。雨続きでサトウキビの収穫が激減したり、雨の日は労働者を働かせてはいけない法律（労働者保護法）ができたため、広大な土地で農業経営するのは難しくなったから100万ドルで販売した。

ゴルフ場は造成して10年以上経過しているが、まだクラブハウス内の造作は完全ではない。楽しみながらゆっくりやるつもりだという。会員は150人、１か月の会費は100USドル。

クラブハウスのグリーン近くに兄の故沼田貞作氏と正治さんの銅像が建っている。OB（アウトオブバウンド）なしというのはコースとコースの間が広くとってありその真ん中に、もう１本コースができるような設計である。つまり、36ホールにするのは簡単だ。

今は、夫婦で世界中の旅を楽しんでいる。去年から今年にかけてチリのサンチャゴからアルゼンチンのアコンカグア、メンドサの旅、メキシコシティーからユカタン半島のカンクンまでの旅を楽しんだ。

12. カチ組とマケ組の暗闘はリーダーシップ争いか

第二次世界大戦後、ブラジル日系社会を巻き込んだ大きな混乱がおこった。日本が戦争で負けたか、勝ったかをめぐる騒動である。

戦時中、日本語新聞の発行は停止、集会の禁止など日本人、日系人に対する情報網はほぼ遮断されていた。

終戦になっても日本の勝敗が不確定な状況のなかで、日本は勝利した、

否負けたのだといった言い争いが熾烈になり、この騒動で死者が20人程度発生したと言われている。志村啓夫によれば、死者はいずれもマケ組みの人々で、カチ組には出ていない。

斉藤広志の「日系コロニアにおけるリーダーシップ」(『下元健吉』) によれば、“カチ組ととマケ組の対立と抗争は、リーダーシップ交代それ自体がその底流に孕んでいたと見ることができるとして、カチ組の指導力を握っていた人々は、それまで日系社会にあって陽の当たらない日陰の存在のものが多かった。これらの不平分子が、日系社会の波乱と動揺の社会に乗じて指導者の座に坐ろうと企てても不思議ではなかった。かくてカチ組みの勢力から特攻隊という名のテロリズムが発生し、そのテロに狙われたマケ組の中心的な人たちが戦前のリーダーシップを代表するエリート層であったことも偶然の一致ではなかった。”

こうしたクーデターのようなテロはその背景に、“日系移民集団がブラジル社会のなかに溶け込んでいく過程で、その性格はリーダーの交代を狙った行動” と主張する。

日系ブラジル移民はおもに日本の各地域はから集団で渡航した。移住先で保たれたのは日本の母胎社会での社会関係であり、組織システムだった。同航海者、移住地での地縁集団はそれなりのリーダーの下に生産者集団が維持されていく。

戦後は社会状況が著しく変化する。日本の敗戦が確定すると移民達の故郷に錦を飾る夢は途絶え、永住を覚悟する人々が増える。信仰は仏教からキリスト教へ、言語は日本語からポルトガル語へ、そしてブラジルの土になるための墓づくりが進み、ブラジル人との交流は一段と深化する。

もはや日本的権威や威信では組織をくくれない状況になり、古い形のリーダーはその効力を失うのだ。

日系コロニアにおける旧型の結束は維持しながらも、ブラジル人社会との接点を大きく広げていかざるを得ない。斉藤の言葉を借りれば“内部の連帯を支え強めるための求心的な力と、外部へ拡散展開しようとする遠心的な力が併存して、１つのグループ力学を形成している” 時代の

転換点に、カチ組・マケ組抗争が起こったことになる。

リーダーシップ奪還の意図からカチ組の起こした混乱には将来的な枠組みは読み込まれていなかった。

カチ組の神国は不滅、敗戦はあり得ない論理は、戦後の混乱期には説得力を持ったが、事実が判明するに及んで次第に影響力を失い、マケ組リーダーの台頭を許すことになる。そこには新しい世代の台頭も含まれていた。

背景には、ブラジル永住を志向し、ブラジル人化しようとする多くの日本人移民の心境の変化を読み取ることができるのだ。

日系コロニアという小さな河川から回遊を始めたひとびとは、日本人であるという出自を保ちながらも大海の回遊魚となり、再び元の河川に回帰することはない。

日系社会から巣立つ新しいリーダーたちは、ブラジル社会全域を視野に入れ、外延的・遠心的な志向で混住社会の一員になって行くのである。

カチ組・マケ組争いを単純に、戦後の情報不足の結果と片付けるわけにはいかない。

結び

17年ぶりのブラジルだった。サンパウロ空港から市の中心部に向かう道路はかなり拡幅されていたが、それ以上に車の数が増え、渋滞した。

サンパウロはブラジル最大の都市で人口は1000万人を超えているから巨大だ。高層ビルも随分増えたが、いわゆるビジネス街のパウリスタ通りなどは以前と変わらない。

日系人が多く住み、また日系人の商店街が立ち並ぶサンパウロ市のリベルタージに着くと日本にいる感じになる。世界最大の日系人街だ。

以前とあまり変わらない商店街やホテル、レストランがそこにあって懐かしさを感じた。

壊れたスーツケースの代替を購入するためリベルダージのカバン屋に立ち寄った。八紘学院出身の女性が働いている。佐藤校長、渡辺先生に

学び、北海道海外協会の池理事長、日伯北海道協会の島崎専務などにも世話になりブラジルに移住したという。初めてお会いした女性から私の知人、酒飲み仲間の名前ががポンポンと飛び出す。

道路を挟んで向かいに旅行社「ウニツール」があり、航空券購入のために立ち寄る。

品のよい和服の日本人女性が発券情報に対応してくれた。彼女は40年前、42日間かけて結婚のために渡伯した。ハワイーロサンゼルスーパナマーレシフェ経由サントス港の大阪商船所属「アフリカ丸」という貨客船だった。ベレン通過時には「赤道祭」も行なわれた。

大正・昭和期の移民はすべてマラッカ海峡ーケープタウン経由サントス港だったから、移民船でないとはいえ、こんな航路があることに驚いた。

驚きはそれだけでない。この女性、パラナ州コルネリオ・プロコピオ市の巨大日系ファゼンダ後宮農場の次男吉武氏に嫁いだのだ。

後宮農場は、三菱東山農場・宮本農場、野村農場とならぶブラジル日系人経営の代表格でさまざまな研究対象になっている。

夫は慶応大学在学中ブラジルに足を踏み入れ、一旦戻って卒業し本格的なブラジルのファゼンダ経営に乗り出したが、コーヒー園の霜害全滅などで賃貸農場に変わり、地代収入でしばらく維持したが、その後農場から撤退している。

子供はキャデラックで通学させるなど豪奢な時代もあった、と振り返った。

地球の裏側、日本の対蹠点に近いにもかかわらず、いかにも身近な日本を感じた。

今回、調査のスケジュールの立案や案内は、サンパウロで大橋勘吾さん、ロンドリナで中川原淑也さんが一手に引き受けてくれた。食事や宿泊などにも便宜を図ってくれ感謝に耐えない。

いろんな調査地に同行する度、多くの方々からたくさんの日系移民や協同組合、ブラジル農業に関する書籍や資料をいただいた。そのため「コ

チア産組の展開と終焉」の論稿を起こすことができたが、そこに書ききれない部分を、「変貌するブラジル社会変貌の断章」に収録した。

サンパウロ在住の大橋さんは北海道ブラジル協会のブラジル側副会長だ。

北大獣医学部では三浦雄一郎氏と同期で友人関係にある。卒業式前にブラジルに渡り、アマゾンのトメヤスに入植した。ここは女優小山明子氏の父親がアジアからピメンタ（胡椒）を持ち込み定着させたことで有名な日系人入植地である。

しかし、大橋氏は暑さに耐えられずサンパウロに移動し、肥料関係の商事会社を経営し、今日に至っている。もう、半世紀もの間ブラジルで生活し、市内のアナローザに立派な日伯北海道協会ビルを新築するなど日伯交流に尽力しておられる。

札大の学生像について「最近の学生は、北海道を出て本州で就職したがらない。ましてや外国など夢のなかにもない」というと、「それは困ったことです。若いものは広い地球を股に架けて活躍するのでなければ」と応えた。

中川原淑也さんは佐賀県出身の大工の父親らと戦前に渡伯した。パラナ州ロンドリナ大学教授（地理学）で国際学会でも活躍されている。夫はブラジル人のビジネスマンで、子供はカボクロ（黒人とインデオの混血）の貰い子（12歳）の３人家庭。

市域の中心に蔵のようなおおきなアトリエがあり、週末は絵と彫刻に専念している。

父親の建てた古い家屋は、単に大工というより芸術家、アーティストの雰囲気を感じる。

父親の素養を淑也さんはしっかり受け継いでいると思った。

かつて、中川原さんが一度だけ日本を訪れたことがある。これは東京大学の招きだった。「初めての日本はどうですか」と訪ねたら「日本には、どうして日本人しかいないのですか」、「タクシーの運転手や靴磨きのひとたちが何故、新聞・雑誌が読めるのですか」、「日本人は、どうして知

らない日本人に不親切なのですか」など立て続けに質問を浴びせられた。

日本に生活する人々には気がつかない世界が、日本のなかにあるものだと思った。

外国人から、日本人の見えない日本を教えられる。そのことは意外に多いのである。

今回は、日系人社会を通してブラジルの社会変貌の姿を断片的にではあるが紹介した。

ブラジルの日系人社会でお世話になった方々にブラジル人の中川原さんが感じた日本とは逆の、日本人の見たブラジルを読んでいただければ幸いである。

参考文献

小澤孝雄『コチア産業組合の成り立ち』＜その思想的背景について＞1993, 3　起草者：小澤孝雄

中川原淑也（ロンドリナ大学教授）「ブラジルにおける日本人移民の生活の変化」
『札幌大学付属産業経営研究所論集』　札幌大学付属経営研究所No 3、1984, 3

進藤賢一「ブラジル農業の変貌過程」『札幌大学教養部紀要』第22号札幌大学教養部　1983, 3

進藤賢一「アサイ・ロンドリナの農業と日系人社会＝トレスバラス移住地を中心として」『札幌大学付属経営研究所論集』札幌大学付属経営研究所　1983, 3

進藤賢一「コチア産業組合の仕組みとブラジル農業の現段階」『産研論集第8号』札幌大学付属経営研究所　1991. 3

進藤賢一　「ブラジル産業・風俗小史」『リベラル・アーツ』　第5号　札幌大学教養部1991,10

進藤賢一・前林和寿「業務報告にみるコチア産組の経営実態」『札幌大学教養部紀要』　第38号　1991, 3

ブラジル日系人実態調査委員会　代表　鈴木悌一『ブラジルの日本移民』東大出版会　大日本法令印刷kk　1964. 9

進藤賢一　「コチア産組と農業移住者」飯島源次郎編著『転換期の協同組合』所収　筑摩書房　p115～134　1991, 2

金木良三　松田藤四郎　小野功著『ブラジル日系農場の成立と発展』明文書房　1980, 4

進藤賢一 「今、何故農村リーダーか　ー農村リーダーに期待されるもの」『北方農業』北海道農業会議1983, 8
トレスバラス移住地50年史編集委員会『トレスバラス移住地50年史』パラナ新聞社　1982, 5
進藤賢一「コチア産業組合の展開と終焉」『経済と経営』札幌大学経済学会第35巻　通巻120号　2004,10
沼田信一『戦争と移民』シリーズ・全10巻　凸版印刷　2001, 1

（札幌大学平成16年度助成金報告）